

新たな歴史を作った5日間



福岡・博多にあるスペイン料理店ロス・ピンチョスが十周年を迎えた。フラメンコを心から愛する店主・相良尚登さがるひさとさんが大切に育て上げてきた、九州のフラメンコの中心地の一つである。そのロス・ピンチョスが、6月末に十周年記念ライブを開催。アンヘリータ・バルガスを筆頭にフラメンコ・プーロのアーティストたちと、全国から集まった愛好家たちが織り成した熱い5日間を、企画とスペイン側の制作を担当したセビージャ在住の踊り手・横田万紀がレポートする。

2009年 6/26(金)～30(火)

G: ラモン・アマドル、倭英三

C: ルイス・アマドル、ミゲル・デ・バダホス

B: アンヘリータ・バルガス、横田万紀

文／横田万紀 *texto por Maki Yokota* 写真／石橋親行 *foto por Chikayuki Ishibashi* 協力／博多ロス・ピンチョス

2008年十二月、母の癌がんの2回目の手術のために帰国中、懸案だった博多ロス・ピンチョスのアンヘリータ・バルガスのライブコンサートの企画が、私のなかでグラリと揺らいだ。集中治療室の外廊下でロス・ピンチョスのオーナー相良氏と電話で話す。ライブ予定の6月までに母の容態が変わったら、私は企画・スペイン側制作の責任を果たせないかもしれない。夜中のしんとした病院の廊下で、相良さんの声が痛いほど響く。「直前に中止になってもいい。行けるところまで、行ってみましょうよ」。しばらく絶句して「オレー！」と呟く。私も決心がついた。

翌日、急いで企画の大きな予算や概要を伝えて「十分ご検討ください」と電話を置くと、30分もしないうちに相良氏から「やることしか考えられません」と、返答がある。相良氏の熱い気持ちに打たれる。

公演実現のための長い闘い

それから相良さんと私の、冒険と試行錯誤が始まった。6月のライブを照準に、3年目になるアンヘリータ・バルガスの来日クルシージョ日程のアウトラインを設定した1月半ば、母が自宅療養に入ったのを期に私はセビージャに戻って、アルティスタへの打診・交渉を開始する。日本との連絡も煩雑になってきた3月初めのある日、日本に招聘するアルティスタの一人が直前になって来られない、という悪夢を見てうなされた。こちらの舞台で、カンタオールが前日から連絡不通、あるいは直前にキャンセルという危うい経験をしている私が、一番怖れていることだ。セビージャで代替のアルティスタを緊急に探すのは不可能ではないが、日本では絶対に無理

だ。折しもその日に相良さんから電話がある。「この頃夢に出てきますよね。僕はライブ当日にロス・ピンチョスの会場に長蛇の列ができて、入場案内に苦労している夢を見ましたよ」とおっしゃるので、啞然。スペインの不確実性連続のなかで永年生活している私は、終始相良さんの楽天性に支えられた。信じる者に、幸いあれ！

企画の実現へ向けてセビージャで奔走しているのは私だが、助成金のない日本の自主企画で、採算がまったく取れないという自明のリスクを負っていたのは、相良さんを筆頭とするロス・ピンチョスだったはずだ。

ところが、奇跡が起ころうとしていた。具体的な準備を進めるなか、母の看病と6月の企画の確認作業を兼ねて、私は3月半ばに1カ月帰国する。日本の受け入れ態勢は、着々と進んでいた。

そして6月初め、アンヘリータと私が東京各地のクルシージョのために日本入りする直前、「ライブ5日間計450席、満席完売。立ち見席でもいい」という電話の大半は断っている始末」と、相良さんから嬉しい悲鳴の連絡が入る！ なにかが起ころうとしていた。フラメンコ・プーロ・ヒターノというアンダルシアでもごくマイナーになってしまった領域で、伝説的なアルティスタを3人も招聘し、劇場ではなくキャパシティの小さなクラブオで援助もない、しかも博多という地方都市で催すライブコンサート。それがアフィシオンに支えられた採算度外視の相良氏の勇断で動き出したことよって、当初予想された多大な赤字を帳消しにしようとしているのだ。それを可能にしたのは、遠方から駆けつけようとしている、日本のアフィシオンある

観客層だ。日本のフラメンコ界の商業性に悲観的だった私の視界に、ボツと光が灯ったようだった。

濃密な5日間の奇跡

6月25日：早朝から電話が鳴り止まず。トラブルの連続をその場の判断で即決しながら、脂汗を流す。正午過ぎ、俵さんと福岡空港に走る。ラモン・アマドールとルイス・アマドールの姿を遠くに認めた瞬間、私は歓声を上げる。諸アクシデントにも拘らず、とにかく彼らに着いた！ 彼らの到着で、私たちの空気が変わった。アンヘリータの背筋が伸びる。深夜のロス・ピンチョスのスタジオに、長旅から着いたばかりのラモンのギターが怒濤のように響き渡って、震撼とする。

6月26日：昼前にロス・ピンチョスで、東京から駆けつけた間瀬弦爾さんと音響・照明合わせがある。ラモンの「ここはタブラオでも、格はテアトロ級だ」の一言で、クアドロ形式を止めることにする。メンバー全員揃った昼食時に、それまで私を悩ませていたプログラムがやっと決まる！ 夕方にアンヘリータと楽屋入り。テンションが上がりすぎて、決壊しそうだ。ロス・ピンチョスの入り口に十周年を祝う花環がずらりと並び、博多中州のど真ん中に壮観な眺めだ。その夜ラモンのロンデーニャで幕開けたライブは、1日目にして舞台と客席をアルテと熱狂の渦と化し、ロス・ピンチョスを異次元へと導いた。

ラモン・アマドールのギターは、深海から湧き上がる津波のように聳え立ち、海鳴りとなって轟と宇宙に共鳴し、黒く燦めいて暖かい雨のように降り注ぐ。

アンヘリータのソレアは、苦悩を超えて雲

上を自在に歩く、菩薩さながらだ。威厳と気品を馥郁と香り立たせ、瞬間のインスピレーションで神と対話しながら、即興で踊り抜く。言葉少なく傷ついた心を曝け出し、胸のうちを、思いのたけを、真実を語るのだ。タンゴでは、かつてのトゥリアーナの老婆たちのアルテが輪廻転生するのを、目の当たりにする。ルイスが、ゆるぎない正統の極地を深く唄い上げる。まっすぐな道の果てに、曙光の予感がする。

奇跡のような初日であった。ただし私は前日から失語状態に陥り、プレゼンテーションも危機寸前である。足腰がガクガクして踊りは惨憺たる出来。夕食の席で、無言のままパラパラと涙が流れる。「さんさんがんぼってきて、今になって泣くの？」と、アンヘリータが呆れている。しかし、今だからこそ、なのだ。初日が凄まじい幕開けをしたことに圧倒されて。

6月27日：2日目の舞台は、初日の張りつめた緊張感が沈静してさらに深くなった。この日からプログラムの順番が多少変わる。ラモンとアンヘリータの巨大さは、底知れない。

その昔、夏の夜の野外フェスティバル全盛の時代に、ラモンがソレアの冒頭のファルセータを弾きだすと、冥界から風が吹き始めるのだった。突然明け方の涼風が吹き渡るなか、いつのまにかアンヘリータが舞台に衣裳の裾をはためかせて佇んでいる光景が、ロス・ピンチョスの舞台に現出した。昨夜と同じく観客は総立ち、多くの人が泣いている。

夕食時、シエフの欣ちゃん（川崎欣也）が腕を振った美味なパエージャに、アルティスタたちは感嘆の声を上げる。ロス・ピンチョスのスタッフ全員の心遣いと、博多のファン

の熱さに、日々感動する。

小雨のなか、ホテルまでの10分ほどの道のりを歩きながら、ミゲルの冗談にアンヘリータが笑い転げて止まらない。美しい夜だった。セビージャの生活体験を軸に、フラメンコのコンセプトを共有した6人の間に、なによりも連帯感と愛情と敬意があった。

6月28日：ライブは真骨頂を迎えて、さらに竜巻く。信じられない思いで、夢幻の境地である。アンヘリータのソレアはいぶし銀の世界を展開して、陰影を深めた。1部と2部の休憩時間に楽屋で、2日間とも足腰がふらついて踊れない私に「なにをしているの！」と、アンヘリータの雷が落ちる。2部のシギ

リージャで私は、闘牛場に放たれた牛のように舞台上上がる。ギターとカンテが、凄まじいシギリージャで私を貫く。何年も動かせなかった私のなかのネジが、その時力チツと回った。それを、背骨と内臓で理解した。その日から、魂が私から離れてふと歩く瞬間が、踊っていて視えた。アンヘリータの踊りの異次元性の片鱗を、理解する。舞台を降りるとラモンが「マキは大事なことを掴みつつあるね」と言う。全部お見通しだ。アンヘリータの鳥肌が立つようなテイメントで、涙を浮かべて伴奏していた俵さんが、舞台を降りて楽屋で号泣し「もう、死んでも悔いない」と言うので、絶句する。



夕食後、フイエスタが始まった。ミゲルが唄う。ルイスが唄う。しかし何といつてもラモンが唄って、皆陶然となる。ラモンのアルテと存在感は、周囲を超越して圧倒的だ。

6月29日：アンヘリータは、本番の日の昼食をほとんど食べない。折しも相良さんからの電話に「アンヘリータが朝食後、夜まで果物しか食べない」と嘆くと、30分後に果物で一杯の大きな箱を抱えて、相良さんがホテルまで走ってきた！ アンヘリータはそれを見て、涙ぐむ。私は昼間も制作の雑用に走り回っているので、体力がとつくに限界を超えて朦朧もろろうとしている。しかしライブは日毎に熱気を帯びて、空恐ろしいくらいだ。前日から東京や大阪からの観客層がどつと増えて、視線がさらに熱い。これほどたくさん観客が泣いている舞台、というのを私は見たことがない。アルティスタとスタッフと観客がこれほど一体になっている舞台を、経験したことがない。4日目もロス・ピンチョスに、アルテの熱い地殻が溢れ返った。ギターもカンテも、冴えとノリを増す。私は二十数年来アンヘリータの舞台をセビージャで見続けているが、今ほど自由に確信に満ちている姿を見るのは初めてだ。苦難の人生を経て、彼女の天才性もまた円熟しつつある。

6月30日：最終日の客席の顔ぶれを見渡して「まるで東京にいるみたいです」と、相良さんが呟く。

ギターもカンテも、崇高なまでに翔け昇るところがソレアの出番の2分前になって、アンヘリータが一年半前に亡くした長男ホセリートのことを思い出して、楽屋で泣き出す。側にいたルイスと私はあわてる。私は急いで彼女の化粧を直して、舞台に押し出す。しか

しその夜アンヘリータは、混乱したままソレアを踊って、苦しんだ。いつものインスピレーションが湧かないのだ。私はハレオに声を囁ささらす。ギターとカンテがアンヘリータをがちり抱きとめる。なんとか立て直そうと闘い抜いて、彼女は力尽きたように楽屋に戻った。「今夜は自分自身に出会えなかった」と、悄然としている。それでもひるまない見事なソレアだったが、昨夜までの輝きがなかったのは事実だ。しかし自分の弱さを、隠すことなく曝け出して立つ彼女の在りかたは、勇敢だ。私は、言葉もない。2部のティエントのタンゴでは、彼女はふっ切れたように延々とレトラを唄い手に促して踊り続け、舞台を幸せで充たした。今回の共演を一番楽しんでるはずの俵さんが、舞台を降りてまた泣く。私も泣く。

7月1日：ラモンとルイスは、早朝にセビージャへ発つ。この日、金沢へ発つアンヘリータと私を、相良さんとスタッフの面々が空港まで見送ってくださる。嵐のような5日間の消耗と虚脱感で、皆呆然としている。どちらからともなく次回の話になると、相良さんの顔がパツと輝いたので、アンヘリータも私も大笑いする。

後日、四十五年間世界中の舞台に立ってきたアンヘリータが「私たちは今回ロス・ピンチョスで、ひとつの歴史を作った」と、断言した。

闘病中の母に報告する。
人間って、素晴らしい！

